



日本語アタマは、AI時代の助っ人だ

（株）アルティスタ人材開発研究所代表 玄 間 千 映 子

ITとAIは、コンピューターを使うことでは同じだが、別ものと考えることが必要だ。どう別ものなのかというと、問題解決への関わり方が違う。人は何か問題が起った時、

「ソワード」を狙った情報集めに奔走した。時間節約がキーワードの「タ イパ（タイムパフォーマンス）」は、 そんなところに生まれた現象といえ そうだ。

それに絡んだ情報を集め、そして次に解決案をひねり出すということをするが、解決案をひねり出す前の情報集めを手助けしてくれるのがITで、集めた情報を材料に解決案を出してするのがAIの得意とするところ。

ところが次に登場したAIは、解決案を出してくるという存在だ。AIとの協働効率を上げるのに、人の側に必要なのはAIが提示した解決案を取捨選択するという、「選ぶ力」へと変わってきた。「選ぶ力」は、何がベストか「考える力」と連動するが、外山滋比古氏は『思考の整理学』という本の中で「持てる情報を相互に関連づけ、更に要約、圧縮抽象化し、拡散収斂させること」が「考える」という活動には欠かせないと述べている。

この違いは、それぞれを使う側の人の活動にもおのずと影響してくるもので、ITとの協働効率を上げるために必要だったのは、ITが扱う情報が正しいか、十分か、不足があれば補充することだった。ネットの中から補充に最適な情報を拾い出すのに有効なのは、豊富な「検索ワード」。ITと協働するため、人は「検

索ワード」を狙った情報集めに奔走した。時間節約がキーワードの「タイパ（タイムパフォーマンス）」は、 そんなところに生まれた現象といえ そうだ。ところが次に登場したAIは、解決案を出してくるという存在だ。AIとの協働効率を上げるのに、人の側に必要なのはAIが提示した解決案を取捨選択するという、「選ぶ力」へと変わってきた。「選ぶ力」は、何がベストか「考える力」と連動するが、外山滋比古氏は『思考の整理学』という本の中で「持てる情報を相互に関連づけ、更に要約、圧縮抽象化し、拡散収斂させること」が「考える」という活動には欠かせないと述べている。

で、なんとか力も付きそうだ。しかし、一つの情報を「圧縮抽象化し、拡散収斂させる」という内面活動はどうやって鍛えたらよいものか。その答えは、課題を多面的にとらえる力を鍛える所に入り口があるのではないかと考えていたら、ふと日本で馴染みのある「当て字」という言葉遊びの存在に気がついた。

日本では「『めでたい』は『目出度い』か、それとも『目出鯛』か？ いやいや、芽が出る前途を祝うのだから『芽出度い』の方が似合いだろうか」などと、文字そのものの意味にとらわれず、時と場に合わせて「心」で文字を選ぼうとする気風がある。文字が変われば「心」というニュアンスも変わる。けれど、その範囲はきちんと整理がされている。これこそ情報を「圧縮抽象化し、拡散収斂させる」という、内面活動の表れではないかと考えた。

意思疎通の道具である言葉の「読み・意味・綴り」は本来一つずつだが、日本語には、音読みで異文化の心を、訓読みで大和の心をと、「読み」に心を映す仕掛けがある。それが、

「コーヒー」を「珈琲」、「やば」を「野暮」というように、「心で文字を選び当ても意思疎通ができる」という術を備えた言葉に仕立てていると言えそうだ。

「圧縮抽象化」や「拡散収斂」を心次第で容易にできる日本語は、なんだかAIとの協働を加速する「強力助っ人」のように見えてきた。

【筆者紹介】

玄間千映子（げんま・ちえこ）



（株）アルティスタ人材開発研究所代表。國學院大學卒。米インマヌエル大学大学院卒後、米スタンフォード大学ビジネススクール修了。現在、信州大学のコーディネーター兼技術アドバイザー他、団体役員などを併任。著書に『朗働の時代』『ジヨブ・ディスタクリプション 一問一答』『リストラ無用の会社革命』など。

